

形影夜話

乾

特別  
 977  
 1





形影夜話序

形影夜話者。家翁鷓齋先生所錄也。先生之門。病客成羣。拮据刀圭。無復餘暇。此昔年君夫人分娩之日。寓直十數日。塊然獨處。隨得錄之。悉皆係先生胷中蘊蓄。目前經驗。門人讀之。可知吾家醫術之源委也。余前後所購西書數十種。近者

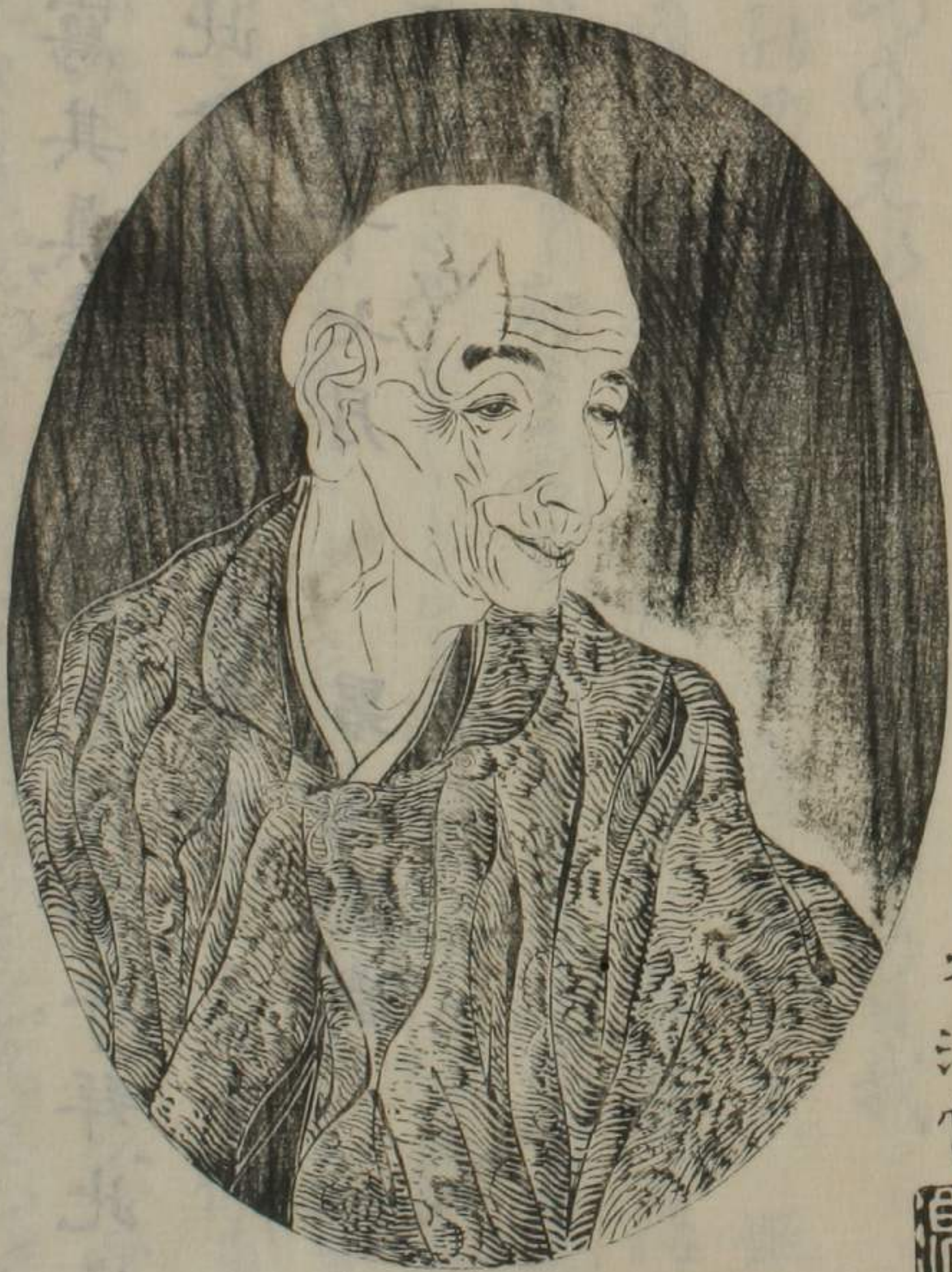
官府有


命。就中俾上。一種地理書。收為

昭和二十八年  
十月二日  
購求



鸕齋杉田朱生肖像



大浪實  


官物。

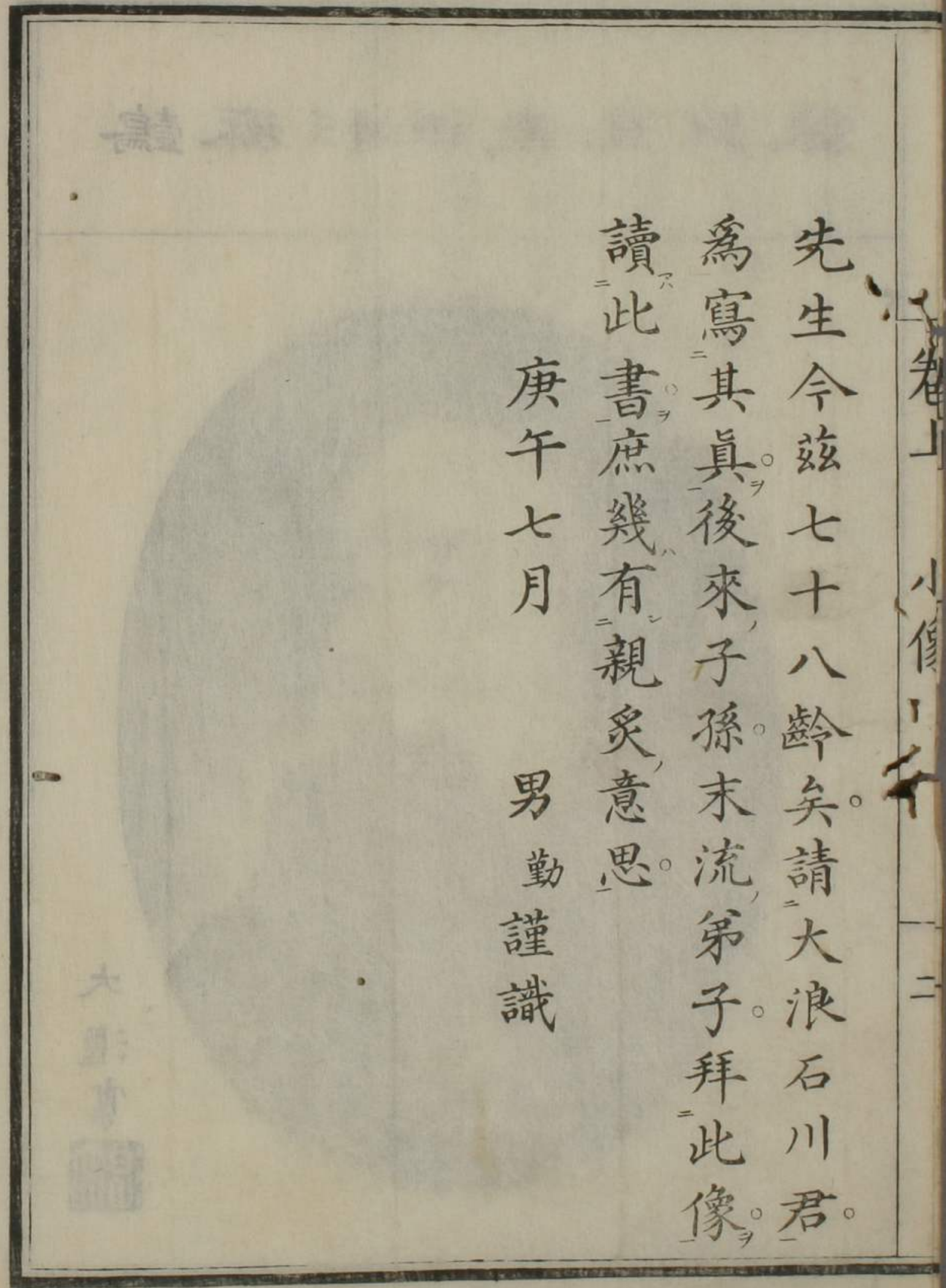
賞賜白銀二十枚。勤深感戴。不敢浪用。因念  
 形影夜話。尚在傳鈔。遂資以刻于家。使門人  
 子弟永獲免筆硯之勞。亦分拜  
 官賜之意也。謹述緣由。以冕簡首。  
 文化己巳冬十月不肖男杉田勤謹識





先生今茲七十八齡矣。請大浪石川君為寫其真。後來子孫末流弟子拜此像。讀此書庶幾有親炙意思。

庚午七月 男勤謹識



形影夜話序

今とていつのえいぬおぼ月廿二日の日我

君のまう多お君お宮はせし女房ありき 姫君

まうけをさる月廿十六日北の御方 若君う海せ

路おいさし法てをさるおもさせ路おさるしに玉のやう

ある 若子御二つこやあくと生まれ出させ路おはれん

御館お肉の法懸ひ目さるしとらんおさなしかあはし

ふよらまふ師とさ皆百まき初のふさあうしはる何めく

意たのまの海惱をおりはさるししよりんみあ

御暇路らぬさまきとしまの海日あふさる路お法事

あまき一人の右直し侍まきあおまきのお月せと







いささか交る曉近くなりては、やめ成はるるもの  
ゆるきまゝに燈の光もさうせむらう。箱かすめい  
ちのいづれか、いづれかありたり。その時、いづれ  
か、その葉をとりて、まゝおもしろく、その形影夜話  
との名は、多傳るるなり。

享和二のころ、霜降月

武藏と下忍とをさへ二国より、お初  
小詩僊堂の主——誌

形影夜話卷上

或夜影子と説話す影子問子の代々醫を以て業と  
其學ふ所注意如何 答曰夫醫の方技の一なり  
諸史も其末に加へ賤しきものふとせり。然まとも良相  
あり、も人の良醫たまきとも、いづれも、四民を救ふ乃  
つなまはさして國家に用さるるものもあらはるるなり  
他乃技藝も上より名人、何れとも醫者も上より名人、いづれ  
かの、いづれか、いづれか、皮表より皮裏、おるを察し、其病  
小應を、乃て薬を與へ、常小復せしむるを、難き故なま、いづ  
あり、他、お、技藝を直に目より、心より、なさんと欲する、或直に  
其、お、を以て、乃て、得れ、とならば、夫、夫、夫、學、い、され、を、



難と見え牛馬の常もありて人々幼より目も觸其姿を  
心も徹し何れものなれと画を学ばざる人の傍に置き  
試み画き寫しむる牛と馬と其状を固し出す  
と何れも多し筆を下し切ぬものなるも筆を把り  
寸も分り引き得るを自由なる夫を然る況や醫  
事をや又其画に学ばざるも才不才によるも功拙を  
めのならり已ま數世画家ふ生れ幼より學びし人をして  
才何れも其道ふ切なる何れも筆を上るも人あは至  
られしものも昔何れ人宗祇法師は連歌の如何  
して上達せん問ひし只好き強くと答へし  
なる諺も好くさる物に上るはそれといふもその心も其

好といふも切なるを切なるもなりまほしと人々の  
連歌を學び画に學ぶ人も其好く所切なるより學ぶ方品  
異なるも人々の翁壯年時連歌に學びし師の  
阪昌周といふ人の常は談話をも其所の連歌の附合あり  
此所の連歌乃附意ありと事々物々連歌の意に盡まりしと  
なりしはまことと紹巴の集の上よりたりと人々移爰せられ  
たり又をき以狩野洞白の家より探幽法印の繪本あり  
と一ツは横軸の諸家より鑒定ふまありし和漢の  
画人物山水四季の圖草木鳥獸蟲魚の類画のめとあり  
其生物寫真までを是の後夜のあはれ某月某日に  
物さるまは何年の何月にんせふまありし繪なりし



真偽其鑑定せし名印を始め其画の讚やうくを悉くは  
 是のら寫しるめしものなり此類數年其間數百軸  
 なく長持八棹まで至りてとかり享保の以沈南蘋  
 としる能画は唐人渡りし時官より我邦に諸名家の  
 画を然るを臨びしは特り探幽の繪は移すせしより  
 吹なり今も其画をみるに臨むるに知らされし實に  
 目を驚かすもの多し是を三四百年來に名人とせし  
 るきり是を力有りて其志の厚き所右寫るしもの  
 も亦知らる其兄弟は牧心齋安信も自適齋尚信も  
 推し雙たる上はたなきを尚信の戈有りし由も其画  
 風流なり安信の才劣りし由も其画雅なり是其戈

と不才とも有りて是非なき所なるべし  
 猶油の如し紗綾縮緬を能織物なきと染色あり  
 志も仕立有りき時人おへるし猶油の劣り  
 たる織物なれと品能免仕立よされり人おへるし  
 ても極おへるしとなきものなり牧心齋安信を猶  
 油のや下地されしと深骨を折仕立をよし心無し  
 也免探幽尚信も劣らぬ上よと移せらるり今も識  
 者も其学し其功力は感して目當とるし学ぬ人  
 多しなり其雅と不雅と取らるる学し程の力のち  
 志も顯るし人のおすれらるる物学ぬ人を誰も  
 有たきものなり殊に醫人命に係る病を療する業を  
 格別



心を用ひ学ふべき人の才不才天授してすき操なりたる處に  
醫者をするなど云ふあり是の憎むく畏るべきの甚なるは也

問語る所頗る是より猶説者や 答はり画家連歌師

のこたうの諸技藝に上る實は好る人の名人をも至る  
事と云ふより翁幼年の頃若州にありし時相識する人  
に富岡左右衛門といふものあり此人炮術家にてありし  
生得の近視ありし土瓶の口見分たす熱湯を茶碗に注ぐ  
とく已まらば股を湯潑せし程なり然る小銃炮をいふ取  
まると十間二十間先キを目當ます隙は小目當の上より  
なり幼年に戯まふ水上の浮ひし水鳥の數を問ひし  
に扇取りの頬より其數を算しぬまらばは然るなり又

山田半助といふ馬術家の年老腰ね多くて行歩も自由ならず  
を已り家内も這ひ何し程なりしふより君もなげき赦  
免戎蒙り時藩中より乗馬して出ぬり其出る夜は  
下部に脊を負き直る馬のいき乗せらるる鐙に足の届くや  
ひりり細いし如何なる若人の乗るやむかん所の  
馬をも已り心は候ふ乗得し行むと思ふ所は快くのり廻  
し常は往き返りたる然るより又窪島俊哲といふ家  
鍼醫へ中風して箸は持てども焼豆腐をのみ切力も  
たきとえ芒針持し人を療むるはと病前ふたふ事  
なりし又宇田川平兵衛といふ裁縫家の是も何寸是  
も何分裁尺用ひす常は帛を裁ち切たり老後



まゝ目のたつひ二分不と何れもさく若き時一寸を思ふ  
所二寸二分ふ裁ち五分と思ふ所六分ふ裁つといふ是等  
皆親しく交りし人ともあり何れも深く深切に已う道哉  
好き学べる輩も一時を懈怠なく修行せし男也なり  
かく何れもふより妙なり其書をばはたるを知らる又白石  
先生の世もと知る博学高識の人なりしう平日意を  
用ひる事尋常ならざるなりとす或時夜話の孫りし  
人何れもふ何れも暇告ぐ悔らんとせし時先生曰  
各の能くえとんはるるを羨しきるありと申孫ひしよ今  
口をば何れもたのむれど我の記憶何れもと申せし  
先生のや尤も何れも何れも何れも何れも皆臆記せし

るどとえり我の記憶何れもき故をよりりの吐つてかく  
頭付し置たるも各悔らるる後清書し侍り形も  
中孫ひるるも有り反古なととら何れも其裏に書きしめ  
られしよし紳書と題せしその今も新本何れも是彼  
頭付し書せしるる又祖来先生或日其従弟ありし  
高松の儒官岡井郡太夫と同し何れも兵学家へ東脩の  
禮を取し入門何れもに其日彼師兵書代講せし小先字  
義よりして一説きたるの兵學者の解する字義をこれ  
不都合の事而已多く聴くふ堪を至る煩はし  
よし兩人聞悩し其事を後打連ぬる路をより扱をよ  
此講釋へ退屈せり一日の鬱滞散せん為め某許に立



寄強くうと郡太夫やせふよる先一段宜しゆ家  
及して彼家の子を夜食調ふ其間先生二日の講  
釋何れ文字ゆく解せし誤り又何の字を何と辨きし  
の差りや一辨しはふ郡太夫聞て扱能く強ひ  
多し我の退屈の何まりしを耳にめらさるしとやせし  
よ先生聞て先何故を善くも悪くも物聞て強  
しものを無益なきやなすしきりふ何しすとや強ひし  
とたり両家とのみ如許の志なるふより白石の白石祖來の  
祖來と各一大家成し強く家なるしとや大才明  
達の人の無益ある片時も消し強ひ況や常人の強ふ  
此の意何れきりなるとも也

問白石祖來の二先生の天縱英才非常の人物たるも  
其他強不才乃者如何し其所に至るき強く醫は  
他の道となし妙所に至るや尤強きりと知る是を  
何れ本は強学んて強なるきや 答先年讚州高松  
に儒官中村彦藏といふ人ありし何れと心も徹する  
やに学ぬるしと門人の教へしきり是實に強きを  
のしし頭上は雷鳴を雷と云はされと耳もめらし  
眼前は白刃を刃と云はされと目もめらしと  
云なきやその人何れ大學所謂視而不見聽而不聞と  
何れ此所たるも聰明睿智とて別義ありしと強視し  
事と目も留りしと強聽し事と耳も留めしと心も徹



一置用も臨んく行ふ哉聰明睿智もさふたきくも軽く  
いへど萬事氣の付ん哉稀くしてつあらんか醫を為んと思  
ぬんか此所を第一として學ぶ事肝要なるなり古より  
醫哉さす人此所も心付さるるもい何さるる一古今一家哉  
立一人の皆博學達才哉輩もして各自見を逞うせし  
も多られとも又皆其本明らるるもあさるるも哉基とせし故  
真理を精詳もさるるも哉はるるも知らる夫い古來醫哉宗と  
出る所の素難うを始め數多哉醫書中に實驗的實なるも  
もの少なれりあり醫へん哉醫さるるの業さるる先身體具  
稟此内外諸物の形質哉精究さるるを第一とせしるるもた  
然るを是と疎る故も從來臟象を説くふも肝へ尤も位すと

いへり又傍もく右ふ在り其治を尤も取ると説き甚し  
きり飲食の先肝も受け肝も脾も傳へ脾も胃も送るるを  
無稽ある妄説哉唱ふるも至きとも一人あれ哉怪しき實り  
就いへり質んとするものあり古今歸一哉書なるも空しく數百載  
をるるもあつた何りとも假令の脊骨推節のめきも元の滑  
氏に其接續の每節下低きありと定む故も大推の俞穴を  
あも在る第一推上陷中と説たり又明の張氏哉説もく其節  
上の高所もく接續はたすありと決せりめはあつたときと脊も  
えりあつた両家哉説一寸程の違ふるも皆をくく已まらねむ  
説ひあつたを證とすまき可となく不可となきり怪しむるも  
ありありも初より好む所哉切なるもなきり故なるなり



真に醫技好む人ありてか揺らあらざるべし人の同し人  
なるゆゑに遠くは人哉醫するに業の不立ると不審  
すんきの第一なるは此邦にて良山後藤氏一見解立  
内經技者破し右に如き迂怪の説を我駁せんとする為  
や一向に經絡の無用のものを覺悟せらまきし千古の卓識と  
稱すべし其門人香川氏あるに繼き起り師業を唱へ自  
己の見識加へ一家を為せり又其小續山脇君出治ひを  
能く心に付まきしめや自ら觀臟して從來に舊説を改  
免古書よりよく九臟に目録唱へ古今の大誤を正し後  
亦かく藏志を著し後下り是亦確實乃所に至るに聊  
る實を就く其本を明くすべしとの端を發せられしと

いふものあり又吉益氏杯の近時の豪傑されし其基と  
まき醫書なき故終に傷寒論一書に精力を盡され  
しは是を錯簡の書よく的實の所少く取る所多し  
らひとく已う心の徹せし方論をわきを取し語を所脈な  
ると用なきものなり偏に腹候をわきを門人も教られ  
しよし是已事をゆるさるるに出るなりし愚老  
家世に醫を以て我君ははあ身をまきはあきてを  
まはるる業あり殊に不好道をもあらはぬ故に幼きより  
和漢の醫書に端を窺ひしよふ生得不也して何  
書を讀くは是非を分たす他人に能く解し得るなり  
只我不也を恥歲月を強くまはるる春秋甫二十二歳



此時同僚小杉玄適といふ男京師の遊学より海のりて其の  
 彼の地より初く古方家といふ事其唱ふの徒出其中に山脇  
 東洋先生杯専ら此事其主張——自ら刑屍を解く觀  
 臟——千古說所其臟象大に異なり其を知りたること其  
 其頃松原吉益採りて其輩相共復古の業を興すのより  
 其諸論說を聞得て其美——きとあり疾醫家といひ已  
 小豪傑興りて旌旗を關西に建たせ我其尾に附人の口惜  
 一々幸に瘍醫其家小生也——身なきとて是業を以  
 て一家を起さる——と勃然と志し立多れと何其目當何  
 を力ふ事を謀るべきを辨へて徒に思慮を勞さるべきを  
 了——斯くて日月をるすうち不圖祖來先生其録外

書といふそのを見多り其中に真の戦といふもの今其軍  
 学者流の人小教する所の如くあるは地は嶮易なり兵に  
 強弱あるは何時の時何時の所にては——採り備て立豫先  
 勝敗を定むる論するものな——總て蘆原萱原もては  
 弓其用たるは雨降るは鏃炮の用立す殊に太平の世乃  
 如く何時もては硫黄焰硝鉛其類市町に買得らるものな  
 何れ諸國乱る時は當りては鉛とては焰硝の出ぬ國を  
 あら焰硝硫黄と出ても鉛の出る國をあらものなり其  
 時の鏃炮あるをて打事するは常は軍理を學びて大將  
 其量る後其勝敗の時を臨みて定むものなりと記——置其  
 多し是を讀て初く發明する事あり是實不然るべき



るりなるなり、我醫之舊染を洗ひ面目改免されの大業は  
立たるなりと悟まき、かく阿ふて後初く真に醫理の遠西  
阿蘭おらんより、我知るなり、夫醫術此本源の人身平素に  
形體内外の機会を精細に知り、究るは、以て此道に大要  
やなすとか、此國に立まはさるり、凡そ病を療する、此に  
精しく、切しく、決する、中的の治療に、たゞさるの理ありと  
よ一二を擧て證す、少く、悪言に似たき、世上の醫者は  
病家へ招き、初小脈を診し、浮沈遲數の指下、小應するに  
知まき、と、其動靜、或るす、その皮下、在る何物ある、と、を  
知らし、血を氣との辨し、と、只脈と、そのなる、と、を、え、と、あ、る  
もの、と、見、ゆ、なる、と、餘、は、淺、猿、し、き、り、な、ら、す、や、又、世、は、三

部九候、或は臍下一寸、腎間の動、或四時胃氣の脈、たゞ、  
移する、皆是一身同一血、此流行する、脈管に應する、それ  
を右の如く、種々名目、或は、取、る、取、ら、ま、さ、る、事、の、  
精神、或は、費し、ひ、こ、ら、其、事、を、信用し、生涯何の辨、  
る、命を、終る、人、ある、如此輩、其、浮、る、なる、と、沈、る、あり、遲  
ま、なる、と、數、と、なる、と、何、に、故、と、さ、る、事、を、知、ら、ま、さ、る、  
や、熱、河、ま、の、數、を、成、る、と、い、ふ、程、に、心得、く、診、候、を、極、め、置、や、  
見、え、り、内、景、に、事、を、詳、なる、もの、其、原、を、明、く、し、す、  
る、なる、と、總、く、脈、と、移、する、もの、血、の、通、り、管、を、り、其、始、を、  
為、す、の、心、に、臟、を、其、心、に、連、なる、大、管、より、血、を、注、き、出、し、  
て、諸、部、へ、周、流、さ、る、と、間、影、を、し、特、に、血、の、和、不、和、を、



あすの脈を切りて其運動候より着實ある  
る東洞翁脰脈をなす用なきものと教らまはし  
疎漏の至りとのみならず先づ古来此書何を  
的實に其事を説たるものなり故に不得已脈  
用のなきものと廢せらまはしと考ふるは是  
豪傑に決断とのみならず今時の如く阿  
蘭此醫理開きて世に語り聞せざるも  
ふべきは今の千古の人とならまはし  
世醫脈の息四至あるものと定む是亦内景  
小暗り故なるなり人より二三動の一結  
するあり又絶く三部脈應せざるあり  
有ると思老々七妻と同藩宮崎甚平とい

る三部の脈ありき北里娼家の大海老屋利十郎  
父あるものと俳優尾上菊五郎といふ男の脈  
二三動必す一結あるは是等共病非  
す平脈如此あり蓋脈管の木根に蔓延し  
似たるなり故に其右へ何れ左へすといふ  
様必す定むたるものなり何れ人より右  
のよりあるは猶人面同しからざるあり  
又脈管諸部に蔓延するは其所に従つて  
大小横斜齋しめざるあり其結代等候  
なきは人か心天稟あり心中の筋攣急し  
縮張の度失ふありあはしとるは是等皆  
内景小明あるはあはしとるなり脈する  
所は腕後三部といふものも即心より  
出せるあり其道路の臂の内廉臑より  
掌中追續き在



のあり如此搏動する脈周身は數條ありまると他は部  
厚肉の所の其動外に見わまひ特は三部の所と尺澤の所  
の骨太に大鼓の桴に如き形或はすぬ及血管其上を越行く  
を以て此所を診まれば脈應するあり既に瘦人の三部  
に下臂内より其脈動皮裏に見ゆるものあり肥人の肉厚  
き故其脈瘦人の比されぬ多し細し是肉裏に沈伏し  
て流行もゆる故あり如此事然知らぬ偏寸關尺と立  
診脈に舊説に迷ひ水の月を取らんとするやある無益の  
事よ力然費し日を送るといふ實に舊説に眩惑し真  
に醫理を究むこと好まざるものなりえたに古より哲  
匠多しといへば此所は心付ざるに似しきとあり

問脈に浮沈遲數を見する如何なる故や 答脈は元  
來皮下に流るる血といふや然らず此浮沈遲數の變態  
の思ひ及及るべきものなり邪熱の爲に血沸涌せらるる  
とき太くあり或血は粘り出たり自由な流まらず又血は  
注ぎ出す原の心臟に内支るべき流行順あり又肺  
に縮張の緩急に従ひて流行に遲速を見するあり大略  
如斯事ふく脈狀の變を察するに其原内景の理を知ら  
ざるに事是に其大略あり  
問近時専ら腹候といふや其主張し是を以て病を察  
し治を施す輩あり其理あるとあや 答腹候は固よ  
る診候の一たる人の強壯或は虚弱等に分ち病の



根結する所は知る小便する所あり尤精きるきりのたのまきと  
臟腑に所在部位連續の狀を常小審みせし人の如何は按腹  
する所の病をせらまざるの理あり是を主張する輩何を目  
當とするや愚老の合点あり常も此部は何の臟あり  
彼の所は何の腑ありとふを知りて後平常に人の如  
此あるなきふ今かく胞脹一又斯く堅硬なるもたつ如何  
ふと疑を設ちね痛者小煩一き所何まふ有りと委く聞  
糾一其面體眼神口舌及肌膚の色を候ひ望み二便乃  
利不利をたつて且病發に新舊及平常飲食の好と不好  
迫り問盡し而後其病の起因一なる所以を審み一從  
つゝ脈弦切一血の運動に緩急を辨し萬事精細に

参考其所由を明かあり一其方は處一藥は  
與ふなきものありに尤るゝ腹候一とのを主し一  
下を何の臟乃部位とせしむるは胸脇苦満に狀は  
見せし柴胡湯の症と定む如何なる意もや實は就  
たまをなき心下は肝あり胃に腑もある大腸を横  
廻す肝の痞塞腫瘍を胃の氣脹滯食を腸の風塊燥屎  
と苦満のするを悉く柴胡湯あり可治也已試刀  
をせし人一朋を切らるゝ尿水をかむる一とありされ  
彼横廻して心下は位する大腸を斷すれはなり按腹家を  
か孫に事聞てを疑ひを生ずる意なく安む一たつそのたつ  
又彼輩常は拘攣と指しその新も小生一



多々のやうと思ひくまふやうなり。是の腹部も定ま  
 り阿蘭名譯されし直筋と稱す。大筋あり病あり  
 又は唯緊急浮起ありきとあり常の腹力の援ち然らず  
 此筋ありて其牽引程より然るに腹状とありなり此筋  
 力緊強あり必壯健ありのなり此真理を辨へては  
 さきや已に二王の木像小腹部へ高低を刻するに即此筋もて  
 力士の相を見し示す為なり又左に臍傍に動氣あり  
 應するを病ありと思ふ人も有る是亦定まらざる在所の動  
 血管の大幹もて其内血の流動するに其血の亢ぬるあり病  
 あり常の動ありある苦のそのなり腎間の動氣といふは  
 此大幹の岐を為して足部へ分る所なり又虚里の動

といふ心尖乃動の應するあり心尖の左室の血は動脈幹  
 へ彈射するなり最を強き以て響動特に大なり心の下  
 尖に即ち左室に下接して勾つて左方に向ひ膈膜に壓  
 する表部も出く正しく左乳下へ接し當ふ以て此  
 動應ありあり此類極め多く猶甚しき臍の部分  
 も堅硬如石の有り此を探り得る塊物と心得たる人  
 あり是の脊骨に隆起せざる脊骨との上細く下  
 太くして背の方へ出す腹裏へ張る出たるものもて  
 殊小臍部より下の方へ至る太きものなり是を按し  
 て塊ありと云ふは餘り小疎漏と云ふはきり何れも内象  
 にも精しと云ふはこれに按腹のありさるなりと知るは此



其等事の審みせずし漫小腹候のを王張し  
治成施さば恐らくと大なる誤を生するし東洞翁  
始ふ此虚を唱へ今其實を吠ふ人多し假令偶中よて  
治し得る病者ありと翁を信難し

問古より所謂經絡やいふもの説如何 答是阿蘭の  
説に依きと動血二脉と神經と之は別あり良山先生  
此説に經絡の舊説の如きものあり一身の在所老  
絲瓜に纏紐する如くなるまじし卓見なり似し  
さきとの盡く然るものあり勿論古人如所説  
十二經十四經あり定めて一身系成卷たる如く順道  
をたし循行するものあり脈の起る所有る血

脈を受る所有り神經の出るといふ至る所の差別  
あり片紙片言のばさるし尤禁穴とらふ必無を  
のといふひかちし一層深き時人暈倒をいふを問はる  
るありそまゝの所他所より至る痛強く徹する内耐  
ゆる所甚し一卒倒せし人ふ小灸芒針に類成湧泉なといふ  
穴所ふ施すと何まの乍ち蘇生するあり死活の術其度  
成得るや得ざるを依りて功害ありとあれ所謂神經大絡の  
在所をまゝなり縦十四經の名状なきものを決せりまて  
も彼禁穴のありといふも不審あるなきあり  
あり誤つて夫等此部を傷まぬ疵微めてもせよ破傷風  
をを發すし其要所なる以てなり一概に彼



先生の如く經絡俞穴を……  
先生其實を究めんと……  
物に是は何彼の某と證……  
洋と見分……  
強く九臟の目小合……  
臟志……  
あり是等……  
良泉の西醫官……  
改……  
何の用……  
問先醫理を知……

谷良山秀菴東洋東洞の四先生……  
五行……  
其論説……  
罪……  
己……  
乃古……  
り……

世世  
世世  
世世



一其書を本源として後人繼て附會せる臆度の諸説  
 茲以て經と尊ひ論と稱して世々相承る後よの數千萬卷  
 此醫書を著作し出たる事と云ふるは是故に先飲食  
 を肝に受肝よを胃に傳ふを以て妄説を唱へ出すやふ成  
 行しるるを世々一家を立し人々恐らくは實に自ら理會  
 せざるを以て説き著せらるは是の如くも何れなきを思  
 ふ程の事を實著するやうに説き為したるものぞんざり  
 故に其説を讀誦反復して能解し得るものなからざる  
 也知らる最後阿蘭陀書に従事せし文字の真し曲釘  
 蚊脚の如く言辭の實に侏儻舌を弄る書き習ひ讀み  
 慣き其説を解すに至れば猶蔗を嚼み先尾を食ひ

其味も及び眞の甘み出る佳境を得しといふるとき  
 に至り彼邦立る所を以て凡醫の業とするもの先始し形  
 體內景の平素を推究するに或第一ふと云ふなり夫れ  
 此身の營養を爲すに飲食を待ち其飲食消化腐熟し  
 て其精液血となり一身を宜越流通するに常度あり若其  
 飲食の變りよるまじく化成する所のもの濃くを稀くも成  
 り或は辛くも酸くも變りて惡液となり是より諸病を  
 醸し成すと説り又風寒暑濕の氣に傷らるるに常に腠  
 理汗孔より發泄する蒸氣彼語るに「オイトワッセミンク」  
 と云ふものの皮裏に留滞して外洩するを能わすは此物  
 病をなすこれ則外淫諸病を因る所なりといふは彷彿を



知らざるやうに成たり是等少くは身體の理を初めたるは  
 悟せざるより想も及ばず如此なる故に醫家學ぶ者此  
 り次第一とてあまざり得る後治療の道は知るといふは  
 甚し況我瘍醫の湯液内治の如く非ず専ら外より施すの諸  
 術種々あるとされ常は身體中此所より何の脈何の經何  
 り彼所は骨の形何の筋何の如何を詳し知ら  
 ずは金創折傷脱臼を療し又腫物も亦また鉞  
 針を下さずすといふ所を知る預め其本を明らめされ治を  
 施と云ふと人を知る多ありと云ふは由つてあま  
 ざり考ふるに預め形體を究る所謂兵家孫呉や同  
 一事なりとて孫呉を知らざれば軍理の立ぬものと聞及

たり醫の形體不詳ならざるは醫理の立たるものと知るは  
 漢土の醫者悉く治療に拙なりといふは其書悉く廢せざる  
 きはあはれなり蓋漢醫の孫呉は知らざる軍師の如くあり  
 只合戦の場敷ふるを以て能戦ひ其功よりなり  
 次第に身立立國を興へる將の如くするものと同一く戦闘  
 と能くせざるも軍理の疎きりゆゑ勝事ありては毎に危き  
 勝軍といふるべきに似るものと云ふは今軍はせんは度々  
 此戰場を經自然と軍は汝合戦免し物師の物語を能  
 聞戦小臨く是は用ゆる人の大功は得る如く醫を漢醫  
 等數人を療し自然と免し療治の機會を書著せし  
 書は汝讀み醫理を従ひ撰ひ用ひて今治療の際に必功を期



すべきなりけり。元來軍理も疎き大將の必勝の理を他人の説事いあらざる。殊に軍を平場は戦い得ぬ。あれは嶮岨の戦いは拙く嶮岨は戦い得ぬ。平場の戦いも不得なり。如く漢醫も温補に偏する。攻劇に偏する。西なる兼たる人か。是本醫理の疎きなる。又薬方の所謂兵器の如し。弓銃炮鎗長刀と其器の別あり。といふも用ふるに各用あるものなり。薬を其如く阿蘭の醫法を取るもの阿蘭の薬は、いふも療治を成り。といふもの。は、いふもを醫理の詳なる法に従ひ。割る所の汗吐下和の法に従ひ。寒涼温熱の利あるもの。は、辨へ薬を與

る時の敗つたなり。九戦を善くするもの。軍に臨む兵器を士卒に授け。是は用ひ。戦ひ。なり。其器もは守るに利あり。攻むるに利あり。物あり。一時に破るに利あり。のあり。其兵の強弱を考へ。器の利鈍を辨へ。其場を利あり。のあり。は、撰用ひ。備は正し。隊伍をその。早く敵を平々を要とす。これ其大將の任といふ。なり。醫も其如く。方ふ漢土阿蘭は差別あり。下す薬は下すものあり。吐す薬を吐すものあり。其病も應じて。いふも功の速なり。薬を撰用ゆ。その。指麾醫者の任なり。前も。來翁の説の如く。弓銃用ひ。所を銃炮の用ひ。あり。又玉薬は出来ぬ時。いふも。只其時に臨む。軍理を以て宜し。應



一戦事肝要るく一醫を醫理を以て何まありとを  
便利より薬方を用ひ條理も差りず病を治すべきものたるを  
和漢阿蘭とてを引く矢は發つものなり鍊炮の火薬  
を用て鉛丸を打出すものなり形も異なれども用はさす所  
も同一事なり薬も亦然る一味の上よりなる大黃の下を  
ものなり麻黄の汗は發すものなり阿蘭もてを同一事なり  
物まことを漢土の醫流の大黃は用ひ其薬氣を直に押  
し下さるるに思ひ麻黄を用ひれり麻黄の汗とありて出る  
やふ思ひ病者も與ふる程ふるなり是只何とあり  
是彼場數の功と同意なり阿蘭又の用ひ意は尤  
あり大黃は性と苦酷ふる腸胃中裏面は神經

を侵襲刺棘は神經是を厭ひ惡く自ら變急其所の  
キリールより水液を搾出しおまをのつて蕩滌驅  
逐さるるなり故に下利の功を奏する事なり假令に眼中  
の細微の塵芥砂末の類入る時と眼胞裏面の神經是を厭  
ひ其部小有る所のキリール中より水液を出し涙と為  
して流し去るなり其惡む所の物もまた蕩滌する  
るものと且専ら膽を扶る薬なり膽汁の性常を變  
たふを調和し復し治するの功あり膽汁を元と  
飲食を消化し其化物を運施するの官なり若此汁調和  
せず腸中注ぐの常は失す時飲食射化すこと  
を得ず化物も運施の道は失す故に諸部凝滯の病を生



此物を與へて其汁を調和し宜を得せしむるとき其本性を  
 逞くするもの停滯物化するを以て蕩滌瀉下の功をもち  
 あり又麻黄の性氣輕浮慄悍ありて能く壅塞を透發開達するの  
 功ありと云ふ一室冷れ外氣に冒觸され皮中の神經攣縮  
 して汗孔壅塞し表發の蒸氣内鬱せしむる於て神經攣縮  
 され惡寒を生ず一蒸氣内鬱せしむる發熱をなすは麻黄  
 麻黄の性氣を以て神經を開達し其攣縮舒暢して汗孔  
 自開き動脈の末抄も疎通す依之血液散渙して蒸氣よ  
 く昇散し皮膚小蒸溜して汗となりて出るなり是等れを  
 辨む唯けりある汗下の能あるもの固已に知るなり一藥  
 性を窺ふに於て遠いほき其功をあるもの固已に知るなり但彼醫理

を学べりある利あることを知りて藥を與ふ其理を辨し一藥を  
 投じざる何との意なき功をあるもの固已に知るなり今日治療法  
 あり漢醫孰煉して自然に用ひるは合して用ひるは方或採取  
 あり我合點せし醫理も参考病小對して斟酌し可下症の下  
 可汗病の汗し可下症の一偶西洋醫説を主張せり  
 人を其闕品多きふ苦し一み阿蘭異方を用すと其不足  
 ありといはるるなり一此等此事を能く辨へ我業の深切  
 かりと自然と療治の功者よ一至るる事あり  
 問然もて醫理も詳あり療治のありなきは 否否  
 假令醫理を詳し究むるも療治のありぬものなりと醫理の  
 あり知り療治のありと思ふは大いなる謬なり所謂書然



以馬戎御すの喻へ趙括の父の書もく却て大敗戎取  
るは類有へ自身ゆを下へ幾度の戦ひ場敷を經さま  
と勝軍とを免ぬと同事もく病人戎敷敷多取扱ひたる其  
上もく猶骨を折療治へ尤和漢の差別もく先哲の  
著へ置る書戎敷讀へかへる時へ下へかへる時へ吐へ  
効を得へと云ふ意を心へ留免患者も對へて用事敷  
多なる内もは自然と醫理符合へ心へ徹する所出するも  
のなり假令是迄自ら療治せざる病もくを醫書を多く  
讀へ能意を留まは其説もく所の塩梅心へ徹底へおの  
ほへく發明もくもへ何もものなりかへく心懸るも自然と  
我業へ上達する苦なり醫理もくも切あるなりと云

只阿蘭の書もく讀へ事足るも思へ誤るももこれ  
祖師の録もくも讀へて經戎知るも禪僧の如く傲慢に  
のへり實用もく立するもとのと云へるへ翁の壯年の時初  
て阿蘭書戎讀へ稍其意戎解へたる頃漢土の外科書戎  
讀へ金瘡の取扱もく何の書戎もく疎へ外への方論  
も何へ用ゆを立事するも廢置へ漢土もく古今瘍醫の  
なきもくと思ひ我業へ自負の心へ出たるも阿蘭其後少  
年輩と外科正宗を會讀せへふ實驗着實なるも多へ  
其中疔瘡もく初め萬靈丹もく發汗へ又砒石戎以へ  
惡血戎去ると何も是等の所を考合するも阿蘭もく諸  
瘡瘍多へは發汗劑戎與へ鬱毒戎折き或刺絡へ充る



血を瀉すと説く品はせめても治療の理の二つあるが、是を以て見まかす先きよ自負せし若氣の誤りありと耻しく思ひしは、但おほくは、漢土の醫を身體の理も疎漏ある毎事着實する所を、古今小勝まじりし傷寒論も身體の吟味正し、一を、見え假し、六經の目を立し、傳經越經等の説、或設有、と思へ無や、論の多し、其上元來錯簡の書、王叔和の、或強し、の、を質んとし、條辨し、初め明清に至り、諸名哲の書論多く、施て我邦も及し、古今の數輩頭、或取し尾も継ぎ尾を取し頭も續き、色く、説き、何ま、是非今ふ至し一定せし翁の文盲故其辨論

の不解、知らし、定ま、又、片押さるるを、我性偏僻あり、知、仲景再生し、此章の彼所を、彼句、此所、と云つ、格別在り、或、翁の全書、思ぬ、但其書中所説其論、其方間、的實あり、有、實も無類正銘の正宗、名作、と、外、善、の、と、何、に、名、の、切、切、切、誤、或、思、人、は、後、世の書、専ら五行配當、主張し、論説を設



一もの所多く捨る所多くして取る所少く志のまこと其取  
 捨する所の多く病人は取扱たる人は少くさきことなきこと  
 のあり阿蘭醫説とて亦志のまこと彼醫も已々好む所に  
 執泥する所なきこと一を所ひさすものから其本とする所  
 正しきある取所多くして捨る所少く但此等の取捨は  
 其讀者の力ふより一翁の壯年の頃長州醫官栗山幸庵  
 及其藩醫等と同く會話せし日ふ幸庵同僚あり一  
 小倉宗爾といふ醫は指て曰此宗爾の良き醫者なり  
 本艸綱目の附方中みくしう用んとしう方百方近く抜萃  
 せしと語りし彼數千の方中より尤も書拔せしと  
 實小具眼の醫といふなり一凡庸めていふぬ所あり何まを

醫の多く書拔讀み療功は積るの後をては名もい至らま  
 ぬと思つるあり書斗讀る功者もあられず療治より  
 一を博く學ひされぬ逢病症は對して當惑するものあり  
 博く醫書は讀其要所を心に徹底し置たる人の機り  
 臨み變ふ應しめの方處し良功は取るものあり書物斗  
 讀るもの病者は多く取扱るべきを療治のありぬとあり  
 譬の白羽の白と白雪の白のぬし白きといふ同事されぬ雙へ  
 する時の其まじり格別なり是を辨へるなり書き分るもの  
 司馬選紫式部筆力といふ及るもの往時鶴屋徳兵衛  
 中へ玉人あり是は其筋もての老高なり一の水精の眼  
 鏡と諳厄利亞製の硝子眼鏡とを見分るは傍觀せしに



黑白の物を揀み分るるの容易も又多かり翁これ哉  
 見て甚感せしむ所至るは書と云ふやめく功者もた  
 場數の功あり此所至るは書と云ふやめく功者もた  
 まは教人哉療治するも自然と功者も至るの場合  
 なり法まも此自然の妙處に至るは父子といへる傳  
 家事何れ已まも此所至るは書と云ふやめく功者も  
 戰場數哉強ゆる物師の自得したる汝合と同じるを  
 及一扱水精と硝子と鐵分別するを試みられ哉哉水  
 精は冷く硝子は温なり是實ふ天然と煨煉との別あり  
 いへる此所軍理と醫理との所あり醫理とあり  
 骨哉折る人の所謂書物好といふものあり療治とあり

骨哉折る人の療治好といふものあり實の醫者好と  
 といふものあり何れ醫者善しせんといふものあり  
 するはさるるの知らるる

形影夜話卷上終



